

チュウゴクアミガサハゴロモ

チュウゴクアミガサハゴロモ (*Ricania shantungensis*) は、中国が原産の昆虫である。2017年ごろ日本に移入し、現在は本州・四国などでの発生が確認されており、石川県では、庭木などで確認されている。この虫は急激に生息域を拡大しており、今後注意を要する昆虫である。

1. 形態

成虫は体長 14～15 mm、前翅長 14 mm 程度で、前翅は茶褐色から鉄さび色であり、前翅前縁中央部の白斑は扁平な半円形かつ輪郭が直線的（写真1）。カメムシ目ハゴロモ科に属する。樹上にとまっている姿は、蛾のようにも見えるが、翅には鱗粉がないことで容易に見分けることができる。



写真1 成虫

2. 生態及び被害

生態には、不明な点が多い。

幼虫や成虫が枝に寄生し、吸汁被害を生じる。発生が著しいと排泄物によりすす病を発症するほか、産卵の際に枝を傷つけることで樹勢を衰弱させることもある。特に直径 10 mm 以下の細い枝に産卵するため、枝折れを生じることもある。

本種は広食性で、カバノキ科、クワ科、ブナ科、マメ科、モクセイ科、ツツジ科、アサ科、バラ科など多くの樹種に寄生することが報告されている。

また、神奈川県が本年8月に発表された病害虫発生予察特殊報にはブルーベリー、オリーブの樹へ加害したことが報告されており、今後注意が必要である。

なお、近縁の在来種としてアミガサハモロゴがいる。